
軽音楽から青春は始まる

ひじき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽音楽から青春は始まる

【Nコード】

N68540

【作者名】

ひじき

【あらすじ】

けいおん！の二次創作です。軽音部に入部した女つばい名前を気にする主人公・関原雪乃をまっていたのはとんでもない先輩たちだった・・・！！文才がないですが、読んでいただけると嬉しいです。

0（前書き）

初めまして

まだ慣れないですが、頑張って書いていこうと思います
よろしくお願いします

春。

桜が丘女子高等学校入学式。

実際、桜が丘女子高等学校と言っているが男子生徒の姿もちろはら見える。

クラス表前をうろつく僕もその一人だった。

桜が丘女子高等学校は今年から共学になった。だが、男女の比は断然女子が多い。

周りには女子ばかりで、少しハーレム気分を味わっていた僕は自分のクラスを確認して体育館へ向かった。

入学式。

学校長の言葉をなんとか眠気に負けずに乗り切り、そのあともなんとか耐え、入学式は終わった。

ちゃらららっ ちゃっ ちゃっ ちゃっ

僕はレベルが1上がった。

入学式を終えた僕は校長、という敵を倒した気分になっていた。

1—B。

僕のクラス。教室にはいつて席につく。
周りやはり女子が多い。

「よお、お前名前なんて言うの?」

声をかけてきたのは席が前の男子生徒。

僕は「名前聞くなり、そっちから言えよ」と思ったが、とりあえず
面倒は起こしたくないから応えた。

「雪乃、せきはらゆきの関原雪乃」

「お前、男子だよな?」

人の名前を聞いた第一声がそれか!!

内心つつこみをいれ、僕は「男だよ」とやや口調を強めて言った。

名前を聞いた奴はだいたいそうだ。

ただでさえ、童顔で背も高いとまではいえなくて女子っぽい容姿な
のに、雪乃、なんて女子っぽい名前だったら誰もがそう言うてくる
に決まってる。

「珍しい名前だな。あ、俺、勝人! たかみねまさと高峯勝人ってんだ」

よろしく、と手をのばしてきた高峯に僕は「こっちもね」と手をの
ばしかえした。

ちやらららっちやっちやっちやっ
タカミネがパーティに加わった。

翌日、のそのまた翌日。

クラスには馴染んできた。今日から、部活見学や入部ができるみたいである。

「ユキ、部活入る？」

ユキ、というのは高峯が僕につけた呼び名である。僕も気に入ったから、そう呼んでもらっていた。

「僕、部活入る気ないよ」

「だよな、俺もだせ。文芸部とか合唱部とかガラじゃねえもん」
そんな会話をしながら、僕と高峯は校門付近をあるいていた。
と、何かみるからに怪しい奴らが居た。

着ぐるみ、着ぐるみ、着ぐるみ。

何部だよ！てか部活なのか！？、とつつこみを小さくいれここはスル！。

怪しい人に関わっちゃいけないと母親から言われているのでな。

「あれ、なんだろうな」

高峯が奴らを指さした。

僕は奴らを見ないように「なんかの勧誘じゃね？」と軽く流した。

高峯とは帰りがまったくの逆方向だ。

僕は高峯と別れ、家へ向かって歩いた。

翌日。

（だんだん、この表現にも飽きてきただろうか。ほかの表現にしろ
だど？…だが断る！↑）

体育館から、音が聞こえる。

僕は自然とそれに引き寄せられるかのように体育館へむかっていた。

体育館の中に入ったとき、僕は一瞬にして魅了されていた。

この感じ、このなんともいえない感じである。それがとても心地よく感じられた。

（やばい、やばいって）

この胸のときめきは止められない。

これは何部なんだろうか。え、軽音部？なるほど。

（軽音部、か…………ッ！）

「…い、…おい！ユキ！！」

「おわッ！？」

突然、耳元で大声をだされ僕は驚き、間抜けな声をあげてしまった。同時に魅入っていた世界から引き戻されてしまった。

「お前、なんでこんなとこ居るんだよ」

「…なんだ高峯か」

たしか帰りは高峯と帰る約束をしてたんだっけか。
すっかり忘れていた。

「なんだじゃねえよ、探したんだぞ」

「ごめん」

行こうぜ、と高峯は僕の手をつかんだ。僕は半ば強引に体育館から出されてしまった。

「…なあ、高峯」

「なんだ？ユキ」

「僕、軽音部に入るよ」

「……………はあッ！？」

高峯の大きすぎるアクションがおもしろおかしく見えた。

そうさ、僕は決めたんだ。

誰がどう言おうと決めたんだ。――

—— 軽音部に入るって!!

0 (後書き)

これはプロローグ的なですね。

まだヒロインたちがでてきてない・・・;;
すいません！（謝

感想、アドバイス、もらえると嬉しくて倒れます

軽音楽か…

体育館での演奏がまだ耳に残っている。

僕は入部希望用紙にドデカく、かつ丁寧に記入し、放課後活動場所の音楽室へ行った。

きつとあんな演奏をするもんだ。

音楽室に近づくにつれ演奏が

あれ？聴こえない、だと

「音楽室で、あつてるよな…」

ぶつぶつ呟きながら音楽室の前まで歩いてきたが音がしていない。活動していないのかも、と思ったが確認のためにもドアを開けることにした。

「こん、にちは…入部したいんですが…」

「りっちゃん、だめだよお」

「唯が言っただろっ」

「ほら、2人とも落ち着いて」

「そうだぞ、こんなところ入部希望者に見られたらどうするんだよ」

何だ、これ。

これが昨日の軽音部？いや、何かの間違いだろう。

……こんなユルいはずがない！！

しかしここは軽音部だった。

「あの一！！」

「……………ん？」

僕の張り上げた声に気づいたのは黄色いピンどめをしていた女子だった。

それに続いて金髪、黒髪、カチューシャの女子が僕をみる。

「…軽音部って

「入部希望者かつ！？」

僕が言い終わる前にカチューシャの女子が僕の肩をつかみながらせまってきた。

近い…顔が近いつて！！

「は、はい、そうです」

「確保〜！」

だから顔が近いつて…！

う、うわっ！飛びついて来やがったッ！

僕は必死に回避しながら入部希望用紙を出した。

「みんな、新入部員だぞっ！」

カチューシャの女子は用紙を僕から取り、高々に掲げた。
そんなにすごいことなんだろうか…。

「わぁー、やったね！」

「よし、お茶にしようかあ」

金髪の女子はなにやらカップに紅茶を入れはじめ、黄色いピンどめの女子は僕の手をとり机へ促した。

なにがおこってるのかイマイチ理解できないでいる僕は、唯一普通の
人そんな黒髪の女子に助けの視線をおくった。

なのに、黒髪の女子は顔をそらした。

ええっ

助けてくれないの!?

僕はそのまますへ座らされ、女子4人に囲まれる形となった。

『軽音部にいらっしやい!』

盛大な歓迎をされた僕は晴れて軽音部の一員となった。
先輩たちはこんな状態だけど…

これから僕にはどんな青春が待っているのだろうか。
希望に胸をふくらませ、僕は「お願いします、先輩方!」と言った。

そんなちよつといい気分になっている僕に爆弾のような言葉がとんできた。

「君、女の子?」

撃沈。撃沈。撃沈。
やっぱり言われたか…。

黄色いピンどめの女子に言われた言葉。

予想はしていたけど言われると言われるで僕のガラスってほどじゃないけどモロいハートは割れた。

「…ちがいます」

ズボンを指さして必死にうったえた。

僕は男です、れっきとした男です。
女じゃないですってば。

「あ、ほんとだ。ごめんねー」

「いえ、よく言われるんで」

内心はボロボロだが。

「よし、じゃあ自己紹介といくか」

カチューシャの女子がパンつと手を叩き、話題をかえた。

はじめは、と僕から自己紹介をすることになった。

「関原雪乃です。」

シンプルだって？

気にしたら負けさ、しんぷるおぶぎべすと！（ジャパニーズなのは英語が苦手ってわけじゃないぞッ

「ユキノ？やっぱ女の

「ちがいます。ユキは冬に降る雪で、ノはなんかこう、かくかくしてる乃です」

黄色いピンどめの先輩が言う前に僕は否定した。

一応、分かってなさそうだったから名前の漢字も言っておいた。

「雪乃くんか」

「ユキでいいですよ」

高峯がつけた呼び名を使わせてもらおう。

僕自身、この呼び名は気に入っているしね。

「わかった、ユキくん。あ、わたしは唯。平沢唯っていうよ」

黄色いピンどめの先輩、平沢先輩が言った。
担当はリードギターだそうだ。

「わたしは田井中律！軽音部部長だよ」

カチューシャの先輩は田井中先輩。
担当はドラムス。

「わたし、琴吹紬。よろしくねえ」

金髪の先輩は琴吹先輩だ。
なんでティーセットをもってるんだろうか、疑問に思う。
キーボード担当。

「…秋山澪だ。よ、よろ、しく」

「こらー、澪！！恥ずかしがるなァッ」

黒髪の先輩が秋山先輩。
担当はベース。

秋山先輩、さっき僕を助けてくれなかったのは恥ずかしかったから
なんですね。

僕は少し呆れながら秋山先輩を見た。

あ、もしかして秋山先輩…

「わたしは目立つのが苦手なんだ…。だからベースだし、って、うわ、やめろ律ー!!」

やっぱりそうだったんだ。

ベースの理由がよくわかった。

部員の自己紹介はおわった。

ちゃらららっ ちゃっ ちゃっ ちゃっ

ユイ、リツ、ツムギ、ミオが仲間になった。

「ユキくん、軽音部に入ってくれてありがとう!」

この後はみんなで紅茶を飲んでいた。

まるで軽音部、ということのを忘れそうな一時であった。

こんな先輩たちだけど、なんだか楽しそうだ。

今度こそ、僕はいい気分になり希望に胸をふくらませた。

これからが楽し

あれはなんだ？

僕は部室のすみにおいてある、なんだかもふもふした物体に目をむけた。

あれってもしや…

僕の脳裏にこの前の校門前の出来事がフラッシュバックした。

怪しい奴ら、校門前にいた怪しい着ぐるみの奴ら…。

『何部だよ、てか部活なのか！？』
内心僕のつつこみがよみがえる。

今なら何部かわかるよ。

軽音部だ。

僕の希望はまたしても消され、明日からが心配になった。

「…はあ」

いまはため息をつくことしかできない。

1（後書き）

連日投稿です^^

どんだけ暇なんだよっていうツッコミは無しですよ

ユキが軽音部にはいりましたね

やっとヒロイン登場って・・・；；

ご感想、アドもらえると嬉しくて倒れます

朝。

僕は急いでいる。もうとんでもなく急いでいる。

なぜか、というと寝坊したからなんて王道な理由じゃない。
道端を歩いていたおばあさんが重そうな荷物を持っていたから、運
ぶのを手伝っていたからだ。

…こら、うそじゃないぞ。誰だうそって言ったの。

ともかくも僕は急ぎ学校へ走った。

到着。

「すみません、遅れました」

僕は堂々と教室へはいった。

周囲の視線がこちらに向いているのがわかる。

「関原、遅刻だ。どうした」

担任はやはり聞いてきた。理由を。
僕は堂々と言ってやった。

「道端でおばあさんを助けてました」

…あれ。

周囲の反応がない。教師の顔は徐々に紅くなるいっぽう。

くすくす女子たちが笑い始める。
いやな予感がした。

「もっと、ましな言い訳をしろ！廊下にたつてろー！！」

的中。

僕はうそをついていないのに怒られ、廊下に立たされた。
…なんてひどい話なんだろう。

授業が終わり、廊下から解放された僕に話しかけてきた奴がいた。
高峯だ。

「どうしたんだよ、ユキ」

「だから、言ったとおりだつて。おばあさん助けてたんだよ」

「うそだ！」

ほら、きたよこれ。

本当のことが本当ってわかってもらえないこの気持ち。

これならうそでもいいから王道の言い訳にすればよかった、と後悔。

「本当だつて。…まあいいや、寝坊だよ寝坊」

僕はあきらめ気味に言った。

「だよな。あ、おまえ軽音部はいつたんだろ？」

うその言い訳を言ったとたんにこれだ。恐るべし、王道言い訳。

軽音部、といわれて僕は少し頭が痛んだ。

あれを軽音部と言っていいのだろうか、僕は少しとまどったが

「ああ、そうだよ」

応えておいた。

「中野も軽音部じゃね？」

「…中野？」

覚えのない名前を言われ、僕は必死に記憶からさがしだす。

「中野梓。居るだろ、俺らのクラスに」

フルネームを高峯から言われ、やっと思い出せた。
ツインテールの女子だ。

「あいつも軽音部なんだ」

ということは中野もあの先輩たちみたいなキャラ……にはとてもじゃないけど思えなかった。

まともな人が居て僕は少し安心。
消えていた希望が少しもどる。

そのあとも高峯とは会話をし、僕は放課後をむかえた。

音楽室前。

やはり楽器の音は聞こえ

、
♪

聞こえた。

「練習…？先輩たちかな」

僕は音楽室へ入った。

僕の目の前に居たのは、ギターを弾く中野の姿だった。

「なんだ、中野か」

「…関原くん、軽音部なの？」

中野はギターをやめ、僕に話しかけてきた。

「ああ、軽音部に入った。中野もだったんだな」

「うん。小学校からやってるから」

「そうなんだ、すごいな」

そこまで話すと、音楽室に先輩たちがやってきた。
相変わらずのユルさをもって。

「ユキくん、あずにゃん早いなあ」

「あ、平沢先輩」

平沢先輩に続いて、田井中先輩、秋山先輩、琴吹先輩が入ってきた。
琴吹先輩はティーセットをひろげお茶の準備を始めた。

本来はおかしい、と思わなければいけないのだろうが僕にはこれが
ふつうに思えてきてしまっていた。
我ながら悲しいよ…。

「つむちゃん、今日は何？」

「今日はマドレーヌよ」

「おっ、やった！」

「これがふつうになってる軽音部っていいのか？」

なんかかんや言いながらも先輩たちは机へついていく。
僕と中野も机へついた。

マドレーヌが美味しそうだ。

どうでもよいことだが、マドレーヌは僕の好物である。

「さあ、みんな食べて」

「わぁー、おいしいーッ」

いつものように「お茶会」が始まった。

軽音部ということを忘れてしまいそうだ。

やっぱり忘れちゃった

最後まで僕たちはマドレーヌを食べながら紅茶をのんびりし

ていた。

「もうこんな時間かあ、じゃ、みんな解散っ」

田井中先輩がパンつと手を叩いて言った。
それを合図に先輩たちは鞆を持ち始めた。

「じゃあねー」

「ばいばい」

「まったなーッ」

「また明日」

先輩たちが音楽室をあとにした。
今居るのは僕と中野だ。

「僕たちも、帰ろっか」

僕は中野へ声をかけた。

「…関原くん」

「何？」

中野がいきなり話しかけてくるものだから、僕は少し驚きのいろをみせた。

「この部活、こんなのでいいのかな」

「え…？」

こんなのでいいってのは、きっと先輩たちのことだろう。
お茶会ばかりで練習をあまりしない先輩たち。
中野はそのことが言いたいんだと思った。

「僕は、練習しないのはどうかと思うけど、いいと思うよ」

そう思った。

たしかに先輩たちはあんなけど、どこかあんなだからこそいい、
なんて思えたんだ。

「けど…」

「中野も聴いたろ？体育館の演奏。」

「うん」

「あんな先輩だから、あんなすごい演奏ができたんだよ。きっと、
先輩たちは今のままが一番いい演奏ができるんだと思うよ」

僕いいこと言った！

「そっかぁ…そうだよね」

中野はそう言っ僕に笑いかけた。

一瞬、胸がドキツとしていたことに僕はあとで気づいた。
今はその中野の笑顔が可愛くて魅入っていた。

「だから、一緒に先輩たちを支えていこう？」

「うん、わたしやっぱり先輩たちの演奏好き！」

「あ、それと僕のことにはユキって呼んでくれてかまわないよ」

「じゃあ、わたしのことも梓でいいよ」

「な…ッ！それは、」

呼び捨てはさすがに恥ずかしいってもんだ。

「ユキッ！」

「な、ちょ……………あず…中野」

やっぱり僕に名前の呼び捨てはできない。
恥ずかしいんだ…。

「いつか名前で呼んでよね、ユキ」

「わ、わかったよ」

そんな会話をしながら、僕らは音楽室をあとにした。

2（後書き）

3日連続です、もうこれ暇としか言いようがありませんね
自分でも認めましょう

あずにゃん登場です

ご感想、アドバイスいただけると嬉しくて倒れます

3 中野梓編（前書き）

3ではヒロイン達ひとりひとりの話を書くつもりです

では、はじめは中野梓編です

3

中野梓編

中野梓 編

今日はテンション低め。

何故かって言うと、原因は中野だ。

まずは教室にて。

「おはよう、中野」

僕は中野にあいさつをした。

もちろん中野はあいさつを返してくれた。けど、そのあいさつが、

「おはよう、関原くん」

…あれ。

中野は僕のことを関原くんと呼んだんだ。
あの時、この前はユキって呼んでくれたのに。

さらには放課後、部活にて。

「僕はいいと思います」

先輩の言ったことに対しての意見だ。
何の話題なのかはスルーしてもらえると助かる。

「わたしも、ユキくんと同じ意見です」

またもや僕はあれって思った。
ユキじゃなくて、ユキくんって。くんって。

あの時は何だったんだよ。

これが原因。中野の僕の呼び方だ。
教室やクラスの子とは「関原くん」で、部活や先輩とは「ユキくん」。
「。こつも呼び方が変わると僕も混乱してしまう。

それと一緒に、あの時をきっかけに少し中野と仲良くなれたと思つてたからちよつぴりブルーになつた。

僕は歸りに中野に問いただした。

「おい、中野」

「ん？ああ、なんだ。ユキか。何？」

ユキッ！？

さっきまで関原くん、ユキくんだったのに今になってユキですか中

野さん。

ますますわからなくなってきた。

「お前さ、僕の呼び方、なんでたくさんあんの？ユキでいいって言っただじゃんさ」

「…そ、それは…／／／」

みるみるうちに中野の顔が紅くなっていった。

下につつむいて何か言っているがうまく聴こえない。

ん？

…ず、かし…？聞き取れず耳を近づけると、

「なっなんとなく！だから気にしないでっ…！」

まったく聴こえなかったのが嘘だったように大きな声をだしてきた。僕の鼓膜は大きく振るえる。それと同じに僕の体もびっくりして震えた。

「う、うん…。わかったよ」

そんな強く言われては頷く以外ない。

「ほんと、気にしないでね」

「わかったって。じゃあ話はそれだけだから。またな」

「え、もう帰っちゃうの」

「もう、って下校時間だぞ。帰るのが普通だろ」

下校時間を知らせるチャイムはもう鳴っている。窓からは下校くる生徒たちがたくさん見えた。

「あ、そっか。そうだよね、じゃあね」

中野のやつは、なにを变なこと言ってるんだろう。
僕は音楽室をあとにした。

そのとき、僕は中野の気持ちには気づかなかったんだ。

3 中野梓編（後書き）

なぜ梓からっていうと、前回の終わりから流れがそれっぽかったのだから感想、アドバイスもらえると嬉しくて倒れます

3 平沢唯編（前書き）

今回は平沢唯編です

3

平沢唯編

平沢唯 編

僕のクラスに平沢憂という生徒がいる。いま、僕の右隣の席だ。その平沢が僕に話があると呼び出してきた。

はつきりいつて、平沢とはあまりかかわりをもっていない。僕なんかになんの用なのだろうか。

「えーと、話って何？」

「あのね、関原くん。わたしのお姉ちゃんに付き合ってほしいのっ
！！」

「…え？」

いきなりそんなことを言われて困った。

平沢とだって親しくないのに、そのお姉さんとなんておかしいだろう。平沢は何ておかしなことを言い出すんだ。

「お姉ちゃん、ここのお店のアイス、すっごく楽しみにしてて週末

にわたしと食べることになってたんだけどね、わたし、予定ができちゃって…」

どこかの店のチラシを僕に見せながら平沢は言う。

「それで、僕にかわりに行けと？」

「うん、お願いしたいんだけど…」

「うーん…。わかった、おっけえ、りょーかい」

多少見ず知らずの人とだから不安ではあったが、平沢がこんなをお願いしているし、僕は引き受けることにした。
週末は暇であつたし。

「本当！？ありがとうっ」

そして来たる週末。

待ち合わせ場所にて僕は待っている。

改めて思った。

知りもしない人となんか出かけて大丈夫だろうか、と。

「ごめーん、遅れちゃったー」

どこか気の抜けた声が聞こえてきて、僕はその声の主の方を向いた。

「……………先輩っ!？」

「あっ、ユキくん!」

目の前に現れたのは平沢唯先輩。

僕は戸惑った。僕が待ち合わせをしているのは平沢憂の姉であり…
あっ。

平沢唯と平沢憂。名字一緒じゃん。

「平沢先輩、もしかして妹の名前って…」

「憂だよっ」

やっぱりそうであつたか。

しかし、あのしつかり者のイメージの平沢の姉が先輩だったとは想像もつかなかった。

どっちが姉だ、と言いたくなる。

「今日は、アイス食べに行くんですね」

「そうだよっ。憂がユキくんに頼んだって言ってたから。ユキくん、アイス好き？」

「まあ、好きですよ」

なんだか、急に不安が吹っ飛んでいったようだ。

僕はかぼちゃ、平沢先輩はイチゴ味を食べている。正直いう、すごくおいしい。

「美味しいですね」

「∴。(じー)」

「∴平沢先輩？」

「∴。(じー)」

どうしてそんなにこっちを見るんですか、先輩。
平沢先輩は無言で瞳をキラキラさせながら僕、じゃなくて僕のアイ
スを見ていた。

「一口食べますか？」

僕がアイスを平沢先輩の前に差し出すと、

かぶっ

素早い動きで自分のスプーンでアイスをのっけて食べた。なんか、
けっこうな量が消えていた僕のアイス。

僕もアイスを味わう。
かぼちゃ、おいしい。イチゴ…食べてみたい。平沢先輩くれないだ
ろうか。
ぽけーっとしていると、

「ユキくん、ほっぺにアイスついてるよ」

うつかりアイスを頬に付けてしまったみたいだ。
僕は「どこですか」と言っただが、平沢先輩は「そこそこ」と言うば
かりで「ここですか」と聞くと「違っよー、ここ」とまったく僕の
頬のアイスはとれる気配がなかった。

「だーから、ここだって」

「ひ、平沢、先輩…!？」

か、顔が近いです、先輩。

平沢先輩は僕の顔に顔を近づけてきて、頬のアイスを指でとった。
そしてその指を――

ぺろっ

「ちょ、何してるんですか先輩ッ！！それ、そのアイスって…ッ！」

アイスは頬と言っても口付近についてました。ということは、少し口にふれていたと思います。

僕の口にふれたアイスを平沢先輩がなめた。これはまさしく、

間接キス。

じゃないか。

「かぼちゃおいしいー」

とうの平沢先輩はまったく気にはしていない。
僕は意識しまくりだった。

「わたし、もらってばかりだね。イチゴ食べる？」

そう言って平沢先輩はスプーンにアイスをのつけて僕の前にさしだしてきた。

僕は、心臓がドギマギしていて、ほんとに食べてみたいのに「いえ、平気です」と言ってしまうていた。

平沢先輩は「そっかぁ」とスプーンを自らの口へ入れた。
そんな平沢先輩の口元をガン見している僕が居た。

このあとがどうなっただつて？
そんなの聞かないでくれ。

3 平沢唯編（後書き）

どうでしたでしょうか？

ベタな転回でしたがベタな転回ほどいいものはないと思います

ご感想、アドバイスもらえると嬉しくて倒れます

3 秋山漫編（前書き）

今回は漫です^^

秋山澪 編

夜。

困ったもんだ。

学校に英語のテキストを置いてきてしまったのだ。提出は明日、テキストはまったくおわってない。
というわけで、僕は学校へ歩いていった。

夜の学校は昼と変わらないはずなのにまったく別の建物に見えた。
学校に入って教室からテキストを取って戻る、それだけ。おかしい
ことはおきない、おきないでほしい。

「よし」

校門をくぐり、校舎に入ろうとしたその時

ガサ、ガサガサガサ

ツ！？

この音は、まさか…

僕は恐る恐る植木をみる。そこには誰もいないはず…

が、居た。

「…秋山先輩？」

植木のすみに居たのは秋山先輩。かなりガタガタ震えていた。

「…だ、誰だツ！？」

「僕です、雪乃です」

後ずさりする秋山先輩を安心させるように、なだめるようにして歩み寄った。

それをみた秋山先輩は安心したのか、植木のすみから出てきてくれた。

「なんだ、ユキか。どうしたんだ、こんな時間に」

秋山先輩こそ何をしているんだろう、と思ったが、僕はとりあえず「テキストを忘れたので取りに来ました」と言った。

「そうか、実は私もそうなんだ。よかつたら一緒に行かないか？」

そう言っている先輩の顔には、よかつたら、じゃなくて明らかに一緒に行ってくれ怖いんだ、とかいてあるようだった。

若干、僕も怖かったから一緒に行くのはわるくない。第一断る理由がない。

「いいですよ」

「本当か！？よかった…」

僕と秋山先輩は校舎へと入った。

「せ、先輩…」

「なんだ？」

「あの…」

「どうした」

「…服、伸びちゃうんですけど」

さつきから秋山先輩、僕の服の端を思いっきりつかんでいる。

「あ、ああ！ごめんな」

と、言いながらも秋山先輩が服を離す気配はない。

「ユキ…」

「何ですか？先輩」

「手、繋いでいいか？」

え。

僕が驚いたような顔をしたからだろうか、秋山先輩は慌てて

「いや、そう言う意味じゃなくて、服つかんできると伸びちゃうから、手なら平気かなって…」

と言った。

要するに、怖いから離れないようにしていたい、ということなんだろう。

「手、ですか、いいですよ」

これまた断る理由がないから、僕は応じた。

それを聞いた秋山先輩は、ぱあっと顔が明るくなり「ありがとう」と言ってきた。その笑顔は窓から入った月の光に照らさせて、とても綺麗だった。

「せつ、先輩の教室、先にい、行きましょう」

手を繋がれて妙に恥ずかしくなってきた。体温が徐々にあがっていくのが自分でもわかる。

「うん」

秋山先輩もテキストをわすれていた。
教室に入って取ってきて、次は僕の教室だ。
非常口の緑の光だけが廊下を照らす。
足音が2人分だけ響いていた。

ガコンッ!!

「ひゃああッ！」

「うわ、あ、秋山先輩…ッ！」

突然大きな音がして、その音はなにか、とたしかめようとした僕に、秋山先輩が抱きついてきた。突然のことに僕はバランスを崩し、そのまま床へ倒れてしまった。

「あ、ユキ…わああッ…！」

ズデンという音が響いた。

「秋山先輩…、大丈夫ですか」

倒れたショックで少し視界が眩む。僕は秋山先輩が心配だったから話しかけた。

「ああ、大丈夫だ…」

「そうですか、よかった——」

眩みが直ってきた僕の目の前にあったのは、秋山先輩の腰。正直、けっこう僕たちアブナイ態勢だと思う。

「ごめんな、わたしが驚いたせいで…」

「先輩…降りて貰っていいですか…／＼／」

「え…ってうわあああ！！！」

秋山先輩、僕から離れるや否やさらに3メートルほど離れた。

先輩の顔は真っ赤だ。耳まで赤くなっている。

僕も自分ではわからないけれど、体が熱い。きっと真っ赤になっているに違いない。夜で冷えているはずなのに、2人の間だけは熱かった。

「…先輩」

「ごめん、そんなつもりは更々ない、安心して、ごめん…！」

「いや、僕は平気です。はやくテキスト取って戻りましょう？」

「…そ、そうだな。行こうか」

僕と秋山先輩は教室に行き、テキストを取った。そのままげた箱へむかったが、その途中、秋山先輩と手を繋げなかった。
僕からも繋ぎに行かなかったし、先輩からも繋ぎに行かなかった。
ただ、お互いに顔を真っ赤にしていた。

「ユキ、一緒に来てくれてありがとう」

「いえ、大丈夫です。じゃあ、先輩、また明日」

「うん。じゃあね」

僕と秋山先輩はそれぞれ家へ帰った。

僕は家に帰るとさっきのことしか頭に浮かばなくて、まったくテキ
ストにてをつけれなかった。

次の日、提出できなかった僕がどうなったかは言うまでもない。

3

秋山澪編（後書き）

突然の音の正体はバケツです。バケツが落ちました

今回もベタですね；

しかし！ベタほどいいものはないんす・・・（笑

ご感想、アドバイスもらえると嬉しくて倒れます

3 琴吹絃編（前書き）

今回は絃編です

3

琴吹紬編

琴吹紬 編

大変だ。

僕はとても緊張している。

何故かっていうと、琴吹先輩が家に来るから。

小テストの結果がとんでもなく悪かった僕は琴吹先輩に勉強を教えてもらうことになったのだ。

そして、その場所は学校でも図書館でもない、僕の家。

しかも今、母さんは買い物に行っているから、家には僕と琴吹先輩2人きりになってしまふというわけ。

約束の時間まで後少し。

僕は洗面所に行って顔を洗う。鏡の前で髪型を整える。まるで、デートへ行く人のおようであった。

デートをしたことのない僕が言えることではないのだがね。

ピンポーン。

来た!!

僕は玄関へ向かう。そしてドアノブを握り、

「こ、琴吹先輩、いらっしやい」

「今日はありがとう。勉強がんばろうね」

緊張気味の僕とは正反対で琴吹先輩はとてもリラックスしているように見える。

「じゃ、じゃあ、部屋、行きましょう」

「おじゃまします」

僕の部屋。

部屋のなかには鉛筆がノートの上をすべる音が聞こえるはずであつたが…

まったく出ていない。

部屋に広がるのは甘い香り。

「あの、琴吹先輩…？」

「どうしたの、ユキくん」

「勉強…のほずですよね」

琴吹先輩はティーセットをひろげて、お茶を飲んでいる。ちなみにケーキもあつた。

「ユキくんも飲む？」

「あ、いや……いただきます」

ケーキとお茶の誘惑に負けた僕。自分でも情けないと思えた。

相変わらず琴吹先輩がもってくるお茶と菓子は美味しい。

勉強のことをすっかり忘れてしまっていた僕は琴吹先輩と談笑していた。

刻々、と時間は過ぎていつている。何分、いや何時間だろうか。琴吹先輩と談笑していた僕はやっとなががついた。勉強を教えてもらわないと、と。

「先輩、勉強、教えてください」

「ああっ、そうだったよね。始めましょうか」

「……はい」

しっかりしているのか抜けているのか、琴吹先輩はイマイチわからない。

しかしやっとながの目的である勉強に行き渡ったわけで、僕は安心した。

「……は……。この問題はね……」

「……。」

「それで、こっちの問題は……ということなの」

「……。」

「……ユキくん？」

「すつ、すいません。しっかり聞いてましたよ」

嘘である。

関数やら確率やらわけのわからない言葉たちが耳から入ってきては体のあらゆるところから抜けていく。
琴吹先輩の教え方はとてもいい。それに僕がついていけるレベルにも達していないだけだ。

「もう一回、細かく説明するね」

「ありがとございま――」

近い。近いです、琴吹先輩。
僕の顔の目の前に琴吹先輩の顔があるのだ。この距離、息が互いにかかりあってしまうのではないかと思える。
僕の心臓はオーバーヒートしてしまいそうだ。これでは入ってくる言葉たちも入ってこない。

琴吹先輩はまったく気にしないで勉強を教えてくれた。
僕も教えてもらっているのだからしっかり聞こうと努力したのだが、状態が状態であるからむずかしい。
甘い香りが鼻につく。

はたしてこれがケーキの香りなのか琴吹先輩の香りなのか。

「わかった？ユキくん」

「はい、ありがとうございます」

正直言えば、半分くらいしかわかっていない。

勉強がひと段落すると、窓から西日がいってきた。いつの間にか、そんな時間になっていたようだ。

「じゃあ、私そろそろ失礼するね」

「そうですか、玄関まで行きましょう」

僕と琴吹先輩は玄関へ向かった。

「勉強、わかりやすかったかな？次のテストは頑張ってね」

「とてもわかりやすかったです。今日はありがとうございました」

「また明日ね」

「はい、さよなら」

外に出て、琴吹先輩を見送って家にはいたら母さんの靴があった。気づかなかったが、買い物から帰ってきていたようだ。リビングに顔をだすと、僕を見た母さんが妙にソワソワしていたようだった。がたいして気にもしなかった。

夜。

父さんがいきなり僕に向かってニヤニヤしながら小指を立ててきた。母さんも何故か顔を赤らめていた。

違うって、母さん、父さん。琴吹先輩は彼女じゃない。変な誤解が生まれてしまったようだ。

3 琴吹紬編（後書き）

やっぱしベタな展開h・・・（殴

ご感想、アドバイスもらえると嬉しくて倒れます

3 田井中律編（前書き）

今回の律で5人おわりました!!

3

田井中律編

田井中律 編

休日。

商店街にて。

僕は買い物にかり出され、商店街を歩いている。

これぐらい自分で行けばいいのに、と母さんへ内心愚痴をこぼしながら店へ向かっていると、

「おーい！」

僕の前方に手を振っている女子が居た。

あいにく視力が低いもので、僕はその女子の顔を確認できない。はたして僕に手を振っているのだろうか。それも疑わしかった。僕は無視する。

「おーい！」

だんだん女子は近づいてきた。近づくにつれ顔が見えてきて――

「田井中先輩っ!!」

「ひどいぞ、ユキ。ずっと手振ってたのに」

「すいません、顔が見えなくて」

手を振っていた女子は田井中先輩。

僕は、先輩に「どうしたんですか」と訊いた。田井中先輩も商店街へ買い物へ来たみたいだ。

一緒にどうだ、と言われたから僕は田井中先輩と一緒に行くことにした。

「ユキ！これはどうだ？」

「いいと思いますよ」

「じゃあ、これはッ？」

「いいんじゃないですか」

僕は今、田井中先輩の買い物に付き合っている。どうやら田井中先輩は服を買いにきたみたいだ。僕にハンガーにかかった服を見せては戻し、見せては戻していた。どれもこれも、田井中先輩には似合うのだが、僕はもっとこう、違う感じの服も似合うんじゃないか、と思った。

「ユキは、どれがいいと思う？」

「僕ですか。僕は……」

と言って僕は、薄いピンク生地にフリルの少しついたシャツとキラメル色のベストを取った。

「……なッ！そんな私に似合うわけないだろっ」

田井中先輩、頬を赤らめながら言っている。

僕は田井中先輩に似合うと思って服を選んだつもりだったのだが……。

「ちょっと着てみてくださいよ」

「えっ、でもな……ちょ、わっ」

半ば強引に田井中先輩を試着ルームへ入れ込んでやった。

しばらく経つと、試着ルームのカーテンがあいた。

そこにはしぶしぶ着ました、というオーラがむんむんとでている田井中先輩が立っている。

普段、着ないから落ち着かないのであろう。むんむんとでているオーラの中にどこか気恥ずかしい雰囲気もでていた。

「似合うじゃないですか」

「にっ、似合うわけないだろ！」

「僕はいいと思うけどなあ」

実際そうだ。

田井中先輩にはとても似合っていた。けどもう少し、

「なにするんだよっ」

「こうすれば、もっと似合います」

田井中先輩のいつもは前髪をあげているカチューシャを僕ははずした。

前髪がおりて、女の子っぽくなった髪型に前髪をあげないようにカチューシャをつける。

「そ、そうか……？」

「はい」

「ユキが言うのなら……。この服にしてみるよ」

そのとき僕に笑いかけた田井中先輩はとても可愛かった。

僕の買い物もすんで、僕と田井中先輩は商店街を歩いていた。あとはお互い家に帰るだけなのだ。

「今日はありがとな、ユキ」

「いえ、こっちも買い物に付き合ってくれてありがとうございます」

「まさか、私がこんな服買うなんてなあ」

さっき買った服のはいった紙袋をぶらぶらさせながら田井中先輩は言う。

「田井中先輩、そういう服も似合いますって」

「ははっ。そうか？そんなこと言われたの初めてだよ」

「そっなんですか？」

「ユキのこと、好きになっちゃいそうだよ」

へ。

さざりと言われた田井中先輩の言葉。

僕は意識してしまった。当の田井中先輩は意識しているような顔はしていない。

「そんな、僕なん

「じゃあ、また明日な！」

僕は田井中先輩に何も言えないまま。田井中先輩は家へ帰っていった。

3 田井中律編（後書き）

どうでしょうか？

やっぱりベッ（コラ

次回からは通常どおり話をすすめていきます！

感想、アドバイスもらえたら嬉しくて倒れます

4（前書き）

なんか更新遅れてしまいました^^；

すいません

休み時間。

教室にて。

「ユキっ！ーどーゆーことだ」

「え、何が？」

休み時間。いきなり僕の机の周りに高峯をはじめとした愉快的仲間たちが集まった。

何故か、みんなソワソワしている。

「何が、じゃねえ！まさかお前に、これ、が居たなんてよ……」

と言いながら高峯をはじめとした愉快的仲間たちは小指を立てた。どうしてこんな古い表現の仕方なんだ、こいつらは。しかし、僕に彼女ができた覚えはない。

「彼女？できてないって」

「うそだっ！俺たち、見たんだからな。おい、山岸！」

「これを見よー、関原雪乃ー」

僕のクラスメートである山岸悟がケータイを僕に見せてきた。
なんか、久しぶりにフルネームで呼ばれた気がするな。
映っているのは商店街での僕と――

「はあ……。これ、彼女じゃないよ。先輩だ」

平沢先輩だった。

「先輩が彼女なのかッ！？」

高峯は尚も追求してくる。こうなったらと、僕は平沢を呼んだ。

「平沢ー」

「なに？関原くん」

平沢憂は中野と共に来た。

「僕さ、平沢先輩とアイス食べに行ったのって、お前が頼んだからだよな？」

「そうだよ。あの時はありがとうね」

どーだ、という目で僕は高峯たちをみる。

高峯たちはやっと納得して勘違いを直すかと思えば、逆にふてきな笑みをうかべていた。

「これは何だーい、関原雪乃ー」

山岸はまたケータイを僕に見せてきた。

画面に映っているのは僕と、田井中先輩だ。

こんなのまで見られていたなんて。こいつらは暇すぎだろう、と思えた。

「それも先輩。偶然会ったんだよ」

高峯たちはなかなか信じないような目でみてる。

「関原くんは、律先輩とそういう関係じゃないでしょ？」

助け舟をだしてくれたのは中野。すごく助かった。
それを聞いた高峯たちは納得したようだ。

「なあーんだ。たしかにユキに彼女がいるわけねえよな」

「おいっ、どついう意

「授業はじまるぜ。席つけー」

僕の言葉は途中でどぎれ、授業開始のチャイムが教室に鳴り響いた。

放課後。

「中野、さっきはありがとう」

僕と中野は音楽室へ向かっている。
僕は中野にさっきのことでお礼を言った。

「別に、困ってたみたいだから言っただけ」

「疑いがはれたし、たすかったよ」

「……ほ、本当に、律先輩とは付き合っていないんだよね？」

妙に不安そうな顔で見てくる中野。
僕は「付き合っていないよ」と言った。それを聞いた中野は安心したような顔になった。

「じゃあ……唯先輩は？」

「あれは、平沢が頼んできたから」

「そ、そうなんだ」

「うん。……あ、先輩たちもう来てるかな？」

音楽室を前にして僕は言った。

音楽室の中からは相変わらず音は聞こえてこなかったが、代わりに楽しそうな声が聞こえた。

「来てるみたい、だね」

僕と中野が音楽室に入ると、楽しそうにお茶をしている先輩たちがいた。

見たところ、今日はクッキーみたいだ。

「おーい！ユキくん、あずにゃーん」

僕らを見た平沢先輩が手を振ってきた。

僕も軽く会釈をしながら指定、となっているイスへ座った。

クッキーからとても美味しそうな匂いがする。相変わらず、ここは軽音部なのかと言いたくなる。

「やっぱり、琴吹先輩のお茶は美味しいですね」

しばらく経ち、田井中先輩があることを提案してきた。

「ユキの担当、決まってくない？」

「……………あ」

自分でも気づいた。僕の担当、なかったんだ。軽音部に入っていないながら担当がないとはおかしい。軽音部として恥ずかしい。ということもあって、

「今日はユキの担当を決めよう！」

となった。

「ギターはどうか？」

「コードが……あっ！」

「ベースは……？」

「で、できない……！」

「キーボードはどう？」

「手がこんがらがるーっ」

「ドラムはぶっだっ」

「僕、リズム感到自信ありません」

あくまで言おう。上の文はけっして行稼ぎってわけではないぞ。

ことごとくできない僕。このままでは担当なし、ではないか。同じ一年の中野の担当はリズムギターと決まっているのに。

「どうすれば……」

「……あつ！ユキくん、ちょっと歌ってみてよ」

困った僕にそう言ってきたのは平沢先輩だ。

歌、というとけっして苦手なわけではない。苦手でないと思いたいのだが、生まれてこの僕、カラオケなどにいったことがなく自分の歌がどんなのかわからないのだ。
だが、とりあえず歌おう。

）
）
）

「……………可愛い」

——はっ！？

可愛い、だって！？なに言ってるんだい先輩。

「ユキくん、声可愛いよ」

「平沢先輩……………」

言われてもまったく嬉しくないです。

「みんな、どう？ユキくん、ボーカルはどうか」

平沢先輩はみんなに聞いた。

「たしかに…………ユキ、おまえ可愛い声してんなあ」

え、田井中先輩。

「ユキくんの声、とっても可愛いわ」

ちよっ、まつ、琴吹先輩。

「ユキ……………可愛いぞ」

あれ、えっと、秋山先輩まで。

「いいんじゃないですか」

中野おおおおッ

「じゃあ、決定だね！」

ええええええええええええええええッ！！！！！！

「そんな、ボーカルなんて。だいいち可愛いって……！」

おかしいじゃないか。

僕は男だ。どんなに顔が童顔でも、髪が少し長めでも、背が高いとはいえなくても、名前が女っぽくても男だ。可愛いなんて言われる筋合いはない。

しかも声ときた。声変わりはしたはずなのに。

「わたしは、ユキくんにボーカルやってもらいたいなあ」

平沢先輩をはじめ、「わたしも」と先輩たちが言ってきた。中野も賛成のようだ。

これは……

「ボーカル、やります」

と言うしかないではないか。

1 年 関原雪乃
担当：ボーカル

4（後書き）

なんか最初の方の文は意味わかんないっすね；

とりあえず、主人公の担当をきめてみました

5 (前書き)

なんつーこった！
すんごく更新遅れてしまったあああ

はれて自分の担当もきまり、僕は日常をすごしている。
だが、最近気になることがある。

秋山先輩だ。

何故かって言うところなる。

秋山先輩は僕を絶対避けてるんだ。

部活内でもどこかよそよそしい。そして顔をあわせると顔を真っ赤
にして逃げていく。

……僕、なんかしたかな？

いつもどおり、音楽室に足をはこぶ僕。
すでに音楽室には秋山先輩が居た。

「秋山先輩、こんにちは」

「……………うん」

——
気まずッ！！..

僕は内心シャウトする。

「……………秋山先輩？」

「……………なんだ」

「……………僕のこと、避けてますか？」

もう、ぶつちやけ聞いてしまった方が早い。

僕は秋山先輩に訊いた。

秋山先輩はしばらく黙っていたが、口を開いてくれた。

「そんな、ことはないぞ」

そんなことあるんですね、先輩。

「でも、先ぱ

「やつほーッ」

なんというタイミングの悪さ。

音楽室に平沢先輩、田井中先輩、琴吹先輩がはいつてきた。中野もいる。

「漣にユキはもう来てたのか」

「じゃあ、お茶にしましょう」

僕は秋山先輩に言いたいことが言えず、なんだかもやもやしながら席に座った。

秋山先輩はというと平然としていたのだが、けっして僕と視線を合わせようとはしなかった。

「もうすぐ夏休みだねえ」

いきなり平沢先輩は口を開いた。

そう思えばそうであった。もう季節はいつの間にか7月にはいつていたのである。

まだ軽音部にはいったのが最近に感じていたが………時間って、はやいなあ。

「みんなで遊ぶかつ!!」

えっ、練習じゃないのッ!?

田井中先輩の提案に僕は内心ツッコミ。

しかし、先輩たち（とくに平沢先輩）は遊ぶ気満々の様子であった。

結局、遊ぶことになったわけで、

——
ついにきた夏休み!!!!

5（後書き）

実は体調不良だったもんで；

今もきついんですが、掲載はしねえとなつて^^

感想お待ちしてます

夏休み。

軽音部で遊ぶことになったわけですが、僕には解決しなければいけない問題がひとつあった。

秋山先輩、だ。

あれから秋山先輩はやはり僕を避けてるみたいで、まったく会話をしていない。

いつの間にか僕が秋山先輩を怒らせてしまったのだろうか。それとも、何か嫌なことを言ってしまったんだろうか。

さっぱり、わからない。

明日は軽音部で遊ぶことになっている。

こんな状態で僕は楽しめるのか、心配になってきた。

零SIDE

この頃、ユキと話せない。

話したいのに、体が逃げてしまう。
まったく困ったものだ。

何故、と言われると、応えるのに悩む。
自分でも何故かわからないからだ。

ただ、ユキを見ていると胸がしめつけられるような
体がボツと火を灯したように熱くなるような

なんなのだろう。

自分の気持ちがわからない。

それなのに、明日は軽音部で遊ぶわけで、私はいつもどおりにユキに接することができるのか不安だった。

雪乃SIDE

翌日。

日が沈みかけた頃。

心配と共に僕は家を出た。

僕が待ち合わせ場所に着いたときには琴吹先輩と秋山先輩が居た。

「こんにちは、ユキくん」

「琴吹先輩、秋山先輩、こんにちは」

あくまで自然に接する僕。
秋山先輩は、

「ユキ、か」

ぎこちないながら、声はかけてくれた。
もしかしたら今日一日話せないかもしれない、と心配していたから
それだけでも安心する。

しばらくすると、中野が来た。その後は田井中先輩。
最後はやっぱりというか、平沢先輩だった。

「みんなお待ちせう」

全員そろったところで、いったい今日はどこに行くのだろう。
僕は田井中先輩に訊いた。

「祭りだ、祭り！」

「祭り……ッ!？」

そういえば、周りが賑やかな気がしていたが、ここ近くで祭りが
行われているらしい。

僕たちは屋台の並ぶ場所へとあるいていった。

妙に落ち着かない。

こんな状態初めてだからだ。

今まで女性、というのにあまり関わっていなかったから、自分の周りにこうも女の子がいますと、妙にそわそわした。

今、僕幸せかも……………ッ！！！！

平沢先輩は田井中先輩と一緒にどこかへ行ってしまった。

まったく、あの2人は大丈夫なのだろうか、……。はしやぎすぎていなければいいのだけれど。

琴吹先輩と中野が2人を探しに行ったようだ。

———
「……」

この場には、僕と秋山先輩の2人きりだった。

さつきとは違う意味で落ち着かない。

秋山先輩はどんな様子

「———ッ！」

秋山先輩の顔を横目に見た僕は、秋山先輩の顔が真っ赤なことに気づいた。

焦点のあっていない瞳に、どこか不安げな表情。

「ユ、ユユ、ユキ……ッ」

やっこの思いで絞り出したかのように弱い声がかけられた。

「何ですか？」

「あのな、話したいことが、な……」

「話したいこと、ですか？」

「こっち、来てくれ……」

僕は秋山先輩に手をひかれるままに歩いた。
着いた場所は、屋台の並ぶ場所から少し離れた、大きな木の下だった。

「どうしたんですか？ 先輩」

「ユキ、あのな……私」

そこで秋山先輩は一回言葉を切った。

この先を口にするか迷うような瞳を、僕は、じっと見ている。
そして秋山先輩は意を決したように口を開いた。

「ユキのことが好きなんだ……ッ!!」

好きなんだ。

その言葉が頭を巡る。

僕は

「僕も、秋山先輩が好きです。
けど、それはきっと先輩の好きとは違うと思います。だから……」

「そっか……。突然ごめんな」

「いや、僕も、ごめんなさい」

「じゃ、私は決めたぞ。

ユキが私のことを、女の子として好きになるまで、私は諦めない。
絶対、だ！！」

ドキン

秋山先輩、反則です。

そんな綺麗な瞳で見られたら

意識してしまいますよ。

好きなんだ

この言葉が僕の頭の中から離れることはなかった。
もんもんと頭を巡っている。

「女の子として、好き……か」

秋山先輩のことは好きだ。

先輩としてしっかりしていて、とても尊敬できる。
でも、その好きは………女の子として、じゃない。

あるとき、告白を断ったのはそれが一番の理由だったけれど、僕に

はほかの理由もあったと思う。
何か、心に引つかかる思いがあったのだ。

「あああッ！！ わかんないっ、わかんないっ」

女性との交流の少なさを僕は呪った。
恋愛はさっぱりわかんない。
自分自身もわからない。

く
♪く
♪

携帯が鳴った。

高峯あたりだろうか、僕は携帯を手に取った。
画面に表示された文字は『秋山漣』。

受信ボックスに届いた秋山先輩からのメール。

『今日、空いてるか？』

僕はだんだんと心臓が激しく動いていくのがわかった。

『空いてます』

送信。

秋山先輩からの返信はすぐにきた。
駅前で待ち合わせということになった。

待ち合わせ場所には僕の方が先に着いた。
そして、困ったことが起きた。

（これって……ナンパ？ カツアゲ？）

数名の男共に囲まれた。

男共によると、一緒にお茶しましょう、らしい。

いやいやいや!! 僕、男だし!!

あ、これはきつと、お茶したいから金出せってことだろう。きつとカツアゲだ。

でも、カツアゲもいやだな……。しかし、カツアゲであってほしい。ナンパなわけ――

僕はちらりと男共を見あげたが……。駄目だ! 本気で僕、ナンパされてるっ!!

最悪だ。

こんな童顔で背の低い容姿に、可愛い声(?)のせいでこんな目にあうなんて。

ともかくも、ここをなんとか切り抜きたい。僕は模索する。そのとき、

「私の彼氏になにするんだ!」

凜々しい声が聞こえた。

声のしたさきを見ると、いたのは秋山先輩。

……ていうか、彼氏っ!?

彼氏、という言葉聞いてドキッとする僕と、ぎょっとする男共。

「か、彼氏……！？」

男共は僕を指さして、信じられないように言った。

「僕は！ れっきとした！ 男だ！」

僕の叫びを聞き、男共は気まずそうにどこかへ行ってしまった。

「大丈夫か？ ヌキ」

「ありがとうございます、秋山先輩」

なんだか、どっちが彼氏でどっちが彼女なのかわからない。……いやっ、付き合っていないのだった。

「ユキ、彼氏なんて言っでごめんな？」

「いやっ、そんな――」

言葉の続きに僕は困った。

大丈夫です、なんて言ったら、何故僕は先輩と付き合いなかったのだ。

そんな時は――

「女っぽく見えてしまったのは仕方ないですし。相手の誤解がとけてよかったです」

「そ、そうか。よかったよ」

ユキは可愛いもんな、と秋山先輩は言った。

その先輩の表情は、どこか気落ちしていて、そんな先輩の気持ちに
応えられない自分に少し苛立った。

……というか、ほめてもらっているのに素直に喜べない。
可愛い、と男である僕が言われてもなあ。

その後は、カフェに寄ったりして、秋山先輩と話していた。
いつの間にか時間は過ぎていて、気がつけば日が沈んでいく時刻に
なっていた。

「ユキ、今日は楽しかったよ」

「僕もです、先輩」

またな、と秋山先輩は男前に手を振りながら歩いていった。

そのとき、ふと後ろに視線らしきものがあつた気がしたが、僕はたいてい気にしなかった。

7 (後書き)

感想おまちします

梓 SIDE

ユキが、澪先輩と一緒に居た。

2人で遊んだのだろうか。

思えば、お祭りの時も2人は一緒に居たし……もしかしたら、ユキと澪先輩は付き合ってる？

……いや!!

澪先輩に限って、相手がユキなんてことは、ユキなんて良いとは思わないし、澪先輩ならもっと……って

「私、なに考えてるんだろう」

これでは、まるで私がユキを好きみたいだ。
いや、実際に好きなのだ。

私は、いつの間にかユキに惹かれていた。

だから、漣先輩との関係が気になる。
本当に、2人は付き合ってるのだろうか。

私は気づけば、ユキの家に向かっていた。

雪乃 SIDE

僕はどうかしてしまったようだ。

秋山先輩は本気だ。

僕だけが、なんとなく接してはいけない気がする。

今まで、自分が恋愛について悩むなんて思ってもみなかったから、今の自分がおかしくて仕方がない。

「僕が、秋山先輩を好きになれば……」

ふと思った。

そうすれば、秋山先輩を悲しませずにすむかもしれない。
だけど、心のどこかでそれを許さないでいた。なにか、ほかの気持ちがあるかのような……。

ピンポン

インターホンが響いた。

リビングから母さんが僕を呼んでいる。どうやら、客は僕に来たらしい。

階段を降り、僕は玄関へと向かった。ドアを開けた先にいたのは――

「……………中野？」

「ちょっといい？」

どうして中野が、と思う前に何故、中野が僕の家を知っているんだ、
と思ったが、この際は考えないことにした。
でも、何故中野が僕の家に来たのだろう。

「いいけど……どうした？ 中野」

「付き合って！」

「……………はあっ！？」

今、中野はなんて言った!?

っ、っ、っ、付き合っ、て、だぁぁっ?

そんな、いきなり言われても、僕はなんて応えたらいいんだろうか。

「な、中野、おまえの気持ちは嬉しいんだけど、そんな、いきなり……」

「え?なに言ってるの、ユキ」

「……………へ?」

中野の顔を見ると、僕の反応の意味がわからないような顔をしていた。

もしかして僕は、とんでもない勘違いを……。

「ギターの練習に付き合ってたって言うてるの」

「あ、あつ、ギターね、なんだ、ギターか……いや、そんな、うん、いいよ、練習だろ、いいよ」

暑い^{あち}ー。

身体が熱い。顔が火照っていた。もう、火がでそうなくらいに。僕はとんだ自意識過剰になっていたようだ。中野が僕を好きになるわけがないのに。

「なんか赤くない……？」

「べ、別に！？ ほら、練習、するん、だろ」

なんで僕、こんなに緊張してるんだ？

ただ、ギター練習をするだけじゃないか。

8（後書き）

更新遅くてすいません；

公園。

中野とギターの練習。

……でも僕、ギターできないんだけどなあ。

「……ユキ、どうかな？」

「いい音してる、と思う」

「ユキが言うのなら、安心かも」

待ってくれ。

僕、ギターはさっぱりなの中野も知ってるだろう。
そんな僕に言われて安心なのか？

中野は相変わらず上手かった。

中野の奏でる音は生き生きとしていて、聴いていて心地よかった。
公園のベンチに座っていた僕だが、中野の音を聴いていたら、だんだん……心地よく………なっ………て………

「ユキ？　ちゃんと聴いて………って、あれ、寝ちゃってるじゃん」

「ん……………」

頭がボーっとする。

中野のギターの練習に付き合っていて、聴いていたらどっつやら僕は一眠りしてしまったみたいだ。

「あ、中野、そっいえば中野は……………ええッ!？」

やばい。

近い。

息が

かかる。

「な、中野……ッ」

「……………」

ダメだ。

完全に寝てる。

今の僕のおかれた状況は、こうだ。

眠っている中野が、僕の肩に寄りかかっている。

とても気持ちよさそうに寝ている中野を起こすのは、少し抵抗がある。

それ以前に、中野の吐息が、髪の毛が、肌にふれてくすぐりたい。

と同時にこの状況は――

心臓が破裂する――！！

ん？ 中野、え、ちょ、待……。
肩に力がかかる。

中野は寄りかかっていた肩から、ずるりと落ち、見事僕の膝の上に倒れた。

ひ、ひ、ひ、膝枕！！

そんな状況におかれた僕の思考回路はショート。
相変わらず中野は気持ちよさそうに寝ているわけで、この体制だと寝顔がよく見えてしまう。

中野って、可愛い。

って、僕はなんてことを考えてるんだ！！
でも、この寝顔は……反則だ。

「中野、中野、起きろ」

「……………」

「中野、起きろってば」

「……………」

「おい」

「梓」

梓
S I D E

柔らかい衝撃と共に、意識が戻った。
どうやら私はユキと一緒に寝てしまったらしい。
そして私は今――

ユキに膝枕されている。

恥ずかしくて目があけられない。
いったいユキはどんな表情をしているんだろうか。勘違いかもしれ
ないが、ずっと見られているような気がする。

「中野、中野、起きろ」

(恥ずかしくて、目開けられないって!!)

「中野、起きろってば」

(起きてるけど、恥ずかしいんだよ!!)

「おい――――」

そろそろ起きなきゃ、変に思われるかもしれない。
次、声をかけられたら、起きることにしよう。

「梓」

……ッ！

ダメ。

そんな急に。

名前で呼んでは言ったけど。

今言われたら――

「好き.....ッ!」

この気持ちは抑えられないよ。

9（後書き）

早めに更新できました！
次はいつになることやら・・・

どくん

公園を離れてからも、胸の鼓動が収まらない。
もう中野は一緒にいないのに、まだ中野のことを考えている。

さっき、僕、梓って……。
なんで急に名前なんか、呼んだんだろう。
しかも

好き。

中野の口からでた言葉。

一瞬、本気だと思ってしまった。

でも中野が僕を好くわけはないと思う。

しっかり者の中野だから、きっと真面目な人が好きで、僕なんて、ありえないに決まっている。

『好きな食べ物の夢でも見てたの？』

目を覚ました中野にそう言った。

きつと、口からでた好き、という言葉は夢の中でつい言ってしまった言葉なんだ、と思ったから。

そう思ったのに、まだその好き、が頭から離れない。

しかも、それが僕に対しての好き、だったら良いなんて思い始めている。僕は本当に、どうかしてしまったようだ。

「秋山先輩といい、中野といい……」

僕がどんどんおかしくなっていく。

この夏休みはいろんなことがありすぎた。
もう僕は、僕自身に着いていく自信がなくなってきた。

10（後書き）

短いすね；

でも展開的にいつかいきりたかつたんです

もう次もできてるんで

早めに投稿しますねー！！

新学期。

夏休みも終わって、久しぶりの学校に僕は登校した。

「おっす！ ユキっ」

「ああ、高峯。久しぶり」

久しぶりに見る高峯は相変わらずで、騒がしかった。
相変わらずだったのは高峯だけでなく、愉快的仲間たちもだったよ
うだ。

「久しいなー関原雪乃ー」

「山岸か、久しぶり」

山岸も相変わらずの絡みづらい雰囲気を出している。

チャイムが響き、僕らは始業式のため体育館へ向かった。

始業式も終わり、今日の予定もだいたい終わってきた。

ひとつ気づいたことがある。

まだ、中野と話していない。

話す機会はいくらかあったんじゃないだろうか。
それを逃すなんて……不覚っ！

僕は中野が居ないか今日を見渡す。

居ない……。

廊下に居ないか、教室を出ると

居た！

中野の後ろ姿を発見した。

僕は、別に隠れる必要はないのにドアの陰にかくれながら、中野の近くへ行った。

話し声が聞こえる。

どうやら、誰かと話しているみたいだ。相手は……平沢あたりだろうか。

それなら教室で話してもいいじゃないか、とかすかに思った。

中野と話しているのは

——山岸っ！？

どうしてだ？

何で、中野が、山岸と……？

どくん

見たくない。

もしかして、中野は山岸のことが。

山岸は真面目だし、しっかりしてる。ありえなくはない。
昨日の好きは、山岸に対して……………！？

「おい！ ユキ！！ ちょっと来ーい」

一人考えごとは、高峯の声によって途切れた。

「な、なんだよ高峯」

僕は教室へと戻る。

中野と山岸が気になったが、見たくなかったからだ。

この際、高峯が呼んだ理由がどうでもよくてもかまわなかった。

やはり、どうでもいい内容だった。

11（後書き）

言ったとおり、早めに更新できました！

放課後。

部活動を終えた、僕は帰り支度をしていた。
 普段通り過ごしていたつもりなのだが、やはり中野のことが気にな
 ってしょうがない。

「ユキッ」

「あ、秋山先輩」

「よかったら一緒に帰らないか？」

部室にはもう僕と秋山先輩しか居ないし、ここで断るのも不自然だ
 しな……………。

「はい、そうします」

帰り道。

沈黙が続いていた。

「ユキ、やっぱりもう一度言っ

秋山先輩の一言で沈黙はきられた。

「私、ユキが好きだ」

僕は、我ながら自分が意地悪だと思う。

こんなに秋山先輩の気持ちを聞いているのに、見ているのに、知っているのに、それに向き合おうとしていない。いつも曖昧にしまっている。

いい加減、秋山先輩の気持ちに答えを出したらいいんじゃないか。
秋山先輩と付き合ったら――

――中野は？

違う。

僕は中野のことなんか好きじゃない。中野だって、山岸と仲良さげだったではないか。

これでいいんだ。

僕は秋山先輩、中野は山岸……………って以前に僕は中野のことを何故考えているんだ！

僕は

「……………」

「だ、だから、つ、付き合ってほしいん、だ……………ッ」

「秋山先輩、僕は……………」

僕は

「.....ッ
!!」

貴女が好きです。

12（後書き）

更新が遅くなって申し訳ない；
楽しんでいただければ嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6854o/>

軽音楽から青春は始まる

2011年9月13日07時31分発行